（大正十四年八月十三日第三種郵便物認可）　昭和四年二月十日印刷納本
昭和四年二月十二日發行　（毎月一回十二日發行）　第八卷　第二號

眞土

第八卷　二月號

□私共はともすれば念佛と云ふものを一つの概念で造り上げやうとします。乍然念佛は決してそんなもので捕えられるものではありません。

□若も念佛がそんなもので捕えられるなら、それは一つの死んだ概念でありまして、それは念佛ではないのであります。

□おいしい食物を食べるとき、ほんとうにおいしい時は其の食べてゐることも忘れてその食物に食入つて居るときであります。人からおいしいかと尋ねられておいしいですと答へるときはもう本當の味はどこかに行つてゐる時であります

□それと同じく、眞の念佛も、念佛そのものゝ味いは念佛そのものになり切つて居るときでありまして、念佛のことを考へてゐるときは已に本當の念佛は遠く離れて居るのであります。

□世には念佛をやつたりやらなかつたりする人がありますが、そんな人に限つて多くは念佛に理窟をつけやうとするのであります。念佛は理窟では判らない。たゞ申すより外には仕やうがありません。

□法然上人が「たとい念佛のいはれを聞くと雖も、之を信ぜざれば聞かざるが如し、たとい念佛のいはれを信ずと雖も、之を稱へざれば信ぜざるが如し、念佛は常に申すべきものなり」と云はれたが、之ほど味ふべき金言はありません。

□又上人が、「學性骨になりて念佛や失はんずらん」と言はれたが、之は口先きばかり達者になつて念佛を忘れる人を戒められた言葉であります。

一ぺんでも眞の念佛になつた人がどうして其の念佛を捨てられませう。

□世には「僕も昔は念佛したこともある」などと云ふ人がありますが之ほどあはれにも亦愚かなる人はありません。そんな人々に法然上人の御傳でも見て頂いたらと思います。（念）

目次

如來の動き　尅子
宗教と生活　土屋觀道
所感の一日　安田恢順
禪勝房　中村神羽
吾朋便り

▽我々は死にたくない、無限に生きたいのです、けれど死ななきやならぬのです いや刻々死んでゐるのです。けれど「死」も此の私の「死にたくない魂」だけは殺すことが出來ません。私の肉体を破壞しても私の此の「要求」を破壞することは出來ません。それを思ふと私は「死」に勝つてゐるんですネ。

▽「火不能燒、水不能漂」と法華經の中に謂はれてゐます。私といふものの本体は、本當に火にも燒けぬ、水にも溺れぬ、あるモノであるやうに感じます。恰度玩具の達磨さんを燃やしても、後に錘りの土の塊りが殘るやうに、私達を燒いても、なほ燒け切らぬ、ある「意氣」があります。この「生氣」が如來さまであります。生木を焚いても燒けぬやうに、内にみづ〳〵した「水氣」のあるうちは燒けません、燃えて了つて灰になるやうなのは、人間が枯れてゐるからです。

▽支那の善導大師が或日、家鳴が水の上を游いでゐる樣を見て歎ぜられた、嗚呼信仰も斯く「鵝毛の水に入りて潤はざるが如し」だと、即ち水に入つても濡れもしない浸めりもせない、それであればこそ悠々と水の中を歩いてゆける「生死の中に佛あれば生死なし」で、生死してゆけるのは此の「不染汚」の行裡であります。本當に「八風吹けども動ぜず天邊の月」と、確かりした骨が得たいものであります。

如來の動き

□「此の宇宙の何處に極樂といふ處があるのです、此の宇宙のどこに佛といふ者が居るのです、そんなものを信ずる氣にはなれません。それとも此の宇宙外に在るといふなら、そりや問題外です、而し我々の宇宙、我々の生活とは沒交渉です」。

○「そんな何處らに居るといふやうな小さいものではありません、だから何處にでもゐるのです。居るといふて何處かに突立つてゐるのではありません、煙突や、電信棒と間違へてはいけません、そんな幼稚な宗教思想の時代は既に過ぎました。あなたは正に眞の信仰に目覺めやうとしてみえる。此の「我々一切を生かしてゐて下さる如來さま」がわかりませんか」。

□「我々を生かしてゐて下さる——？」。

○「そうです。一切を活かしてゐて下さる如來樣です。その生命を細かく分けて、あらゆるものゝ中に棲み、あらゆるものを生かし、動かし、働かし、よくならせやうと努めてみえる。惠みのみ心、親さまです。わかりませんか。個々の生命は此の生命を貰つて生きてゐる小獨立で、此れ等の生命の綜合が大如來です。微妙な統一が其儘無限の大人格となつてゐられます。感じられませんか。ソレ首を傾げてみえる動きも、「如來の動き」ですよ、一擧手一投足、如來と離れてみえぬぢやないですか。それだから如來の人格があなたの人格、あなたの人格が如來の御人格で、あなたといふものゝ全体が如來樣に造られてゐるぢやないですか」。

□「フーン、そうすると形のないものですネ」。

○「形があるぢやないですか、現在あなたと云ふ形になつて聽いてゐられるぢやないですか、私といふ形になつて話してみえるぢやないですか。猫を見ても、鴉を見ても、皆そこに如來樣の御人格が拜がめます。だからさういふ形式を通じても、如來樣に逢ふことが出來るし、どんな形も如來樣の眞像でないものはありません。それで茶椀一つも大切だし、米一粒も大事に出來るのです。『偶像の崇拜』だなどゝ云つてゐる人は『偶像』の意味をも知らない人のことです、偶像とはその偶象の裏に、此大生命が見啓けてこそ初めて偶像なんです、此の生命が感じられなくて何が偶像なんでせう、「形」といふこともまだよくわかつて居らぬのですよ」。（尅子）

宗教と生活

土屋觀道

一、思想と生活

古來宗教と生活との關係は非常に密切な關係にあります。而もそれは生活と經濟とが物質的に離るべからざる關係の如く、宗教と生活との關係は其の人の思想生活に缺ぐべからざる重大な關係にあります。

それにもかゝわらず、今日の多くの人々は此の關係を知らずして、むしろ宗教を無用視するかの傾きあるは一体どうしたわけでありませう。それは主として宗教家の罪でせうか、それとも現代の人々の誤りでせうか、私は之を歴史の事實に見るにそれは主として時代生活の變遷によるものと思ふのであります。

然し從來の宗教も昔は盛んでありました。そして又多くの民衆も心から之を信じ之によつて生活をしたのであります。そしてまた昔の多くの宗教家も亦之を信じて之を社會にも説いて居つたのでありました。乍然人類思想の進歩と社會生活の變遷は今や昔のまゝの宗教や思想では到底滿足することができなくなつたので、民衆は自ら之を信ずることができなくなり、宗教家は自ら之を説くことができなくなつて來たのであります。

乍然之は從來のやうな宗教思想の信仰が現代人に入れられなくなつたと云ふに過ぎぬのでありまして、それが必しも現代に一切の宗教がいらなくなつたと云ふのではありません。從つて眞實の宗教は今も尙昔の如く必要缺ぐ可からざるものであります。否それどころか現代は今や從來の既成宗教に信賴することもできず、かと云つて未だ充分に信賴すべき眞の宗教も未だ出でないので、全く其の行くべき道を知らないから、むしろ今日ほど眞の宗教を求むる時はありません。

二、思想と信仰の變遷

然に私共の思想生活と云ふものは其の時代の經濟生活と密切な關係にあるものでありまして、あらゆる思想は其の生活の要求に應じて現はれて來るのであります。

だから思想と生活とは何れが先きに行くかと云へばむしろ思想より生活の方が先行すると云ふべきであります。從つて人類の生活要求がそこまで進んでゐないなら、いかなる高尙の思想信仰も、決してそれは其の民衆にはいるものではありません。即ち多くの民衆は自己の生活に都合よしと感じ得ぬ思想や信仰は決して之れを自分に受け入れぬのであります。而もそればかりではなく、一般民衆の生活はたとい從來の思想信仰といへどもそれが自分たちの生活變化の爲めに之と一致することが出來なければそれを捨てゝ顧みないのみならず、いつしか之を惡むやうにさへなるのであります。而て之等の民衆は之等の思想信仰を捨てると共に更に又新なる思想と信仰とを自らの生活要求を充たすべく求めて止まぬのであります。

古來新しき宗教の出現は即ち此の要求に應じて現はれたものでありまして、所謂世界の大思想家、大宗教家と云ふものも之に應じて出現したものであります。

かうした見方や言い方はマルクス一派の唯物史觀の見方や言方のやうでもありますが、私は必ずし

もそれに立つものではありません。乍然少くとも從來の古き思想と信仰とがいかにして此の世に捨てられ、更に新しき思想と信仰とがいかにして私共に要求せらるゝかを眺むるとき、そこに社會生活の變遷と深き關係のあることを見るのであります。從つて人類の理想も此の民衆の生活を離れては意味を爲しません。從つて人類の道德も哲學も科學も宗敎もその生活を外にして價値はありません。

從て人類の思想信仰は必ず其の民族の生活の根底となるものでなくてはなりません。言かへれば其の民族の生活に關係なき思想信仰は其の民族に於て用をなさないのであります。

三、新しき思想と信仰

茲に於て、從來のやうな古き思想や信仰で其の民族が生活して行くことが困難となれば、此の民族はやがてそれを捨てゝそれ以外の新しき思想と信仰とを求めて之によらうとするのであります。從て古き思想信仰が捨てられて新しき思想信仰が此の世に起つて來るのもそれの爲めです。而もさうならざるを得ないのは更にそれが根底として己に生活の樣式が從來のやうな思想や生活では生活して行かれぬからであります。

之從來の既成宗敎が今日の時代に於て入れられなくなつた根本の理由であります。然を多くの人々は未だ此の道理を知らずして從來のまゝの既成宗敎の思想と信仰とを以て法を說かうとすることは全く時代の變遷を知らぬものと云ふべきであります。即ち從來の既成宗敎は己に百年も千年もの昔に於て、其の當時の社會に適すべく現はれた宗敎であつて、それは封建時代に適すべくあまりに完成した宗敎であります。從つて、今や封建の制度が倒れ、所謂民權自由の社會生活の時代に於て、それが入れられやうわけはありません。之今日の靑年有識者に從來の宗敎が深く喜ばれぬ理由であります。

然は今後の宗敎は果していかなる宗敎であるべきでせう。それは少くとも以上の意味に於て、現代の生活に即したる宗敎でなくてはなりません。而も現代の生活は經濟の上にも思想の上にも非常に疲れて居る時であります。

從て今後來るべき宗敎も之等の思想と經濟の慰安所となり、併せてまたそれ等の思想と生活との活動の源泉たるものでなくてはなりません。

尤も昔の宗敎といへども此の望みが無つたと云ふのではありません。否少くとも佛敎キリスト敎のそれの如きは其の當時に於て、全く其の時代の思想と信仰の中心となり、之によつて其の時代の疲れを慰め、又その時代の活動の源泉となつたものでありました。

乍然今は時代が異ふのであります。從つて昔のまゝの古き思想や信仰では決して今日の時代を救ふことはできません。そこに宗敎の新しき更生の必要があります。

四、今後の宗敎

然は現代の人々は一体何を求めつゝあるのでありませう。それは眞に生るの道であります。眞に生きるとは永生と向上の生活であります。

永生とは永遠の生命であります。天地と共に亡びざる自己の不滅の要求であります。向上の生活とは即ち價値の生活であります。自由と平等と平和の生活と云つてもよい。所謂眞人の生活であります眞善美の統一的活動と云つてもよい。即ち全身全意の活動であります。或は眞我の生活と云つてもよい。命を捨てゝも惜しくない生き涯のある生活であります。

永生と云ふことは單なる肉身の永生ではありません。むしろそれらを超えたる永生の自覺であります。生死を越えたる不死の自覺とでも云いませう。價値と云ふのも單なる價値ではありません。所謂本心の滿足する永遠の理想であります。

而て今や私共は之を法然上人の信仰の中に見出しました。即ち阿彌陀佛の信仰であります。

あらゆる宗教と云ふ宗教のうち、阿彌陀佛の信仰ほど現代人の生活を眞に活かすものはありません。阿彌陀佛は實に無量壽無量光の本体であります。無量壽とは永遠の生命であり、無量光とは限りなき人格の光であります。此の限りなき永遠の生命と光とが所謂私共の人格の中心であり、生命の源であります。

阿彌陀佛の世界とは即ち此の限りなき如來のゐます靈光の天地を云ふ。眞善美の生活は即ち彌陀の淨土であります。永生の光と向上の光とは此の如來より發して來る光のことであります。そこには限りなき如來の大悲が輝いて居ります。而もその光は十方世界を照してあます所がない。此の光に遇ふものは即座に貪慾と瞋恚と愚痴とが消滅し限りなき喜びと望みと力との生活が現はれます。疲れたるものはやすらぎを得、やすらぎを得るものは又働く、此の世さながらの光明の生活がそれであります。（四、二、一、午后三時　東京病院内美智子の病室にて）

所感の一日

圓心寺　安田恢順

一

私は御存じの通り左足がないのと右足が一昨年春よりの病いでどうも充分でないので、この不自由さに外界をもしみじみと眺めることがなく、たゞ成す仕事にもつま先にのみ氣を取られ、轉ばぬやうつまづかぬやうにと注意し乍ら爲さねばならぬことのみを爲さして頂いて居るやうな事であります。

然し今日は暫く寸閑を得て雪の外庭を眺めんものをと昨夏上人を迎えんとて、其の時造つた三疊敷の窓を開いて、木の間より外庭（カド）を見ました。所が外庭一面白々として、目ばゆいばかり雪が積つて居てそこには塵一本も見られぬのであります。

其の時こんなことが思はれたのであります。「我心中には宿世の因緣によつて、自然の道理から持つて生れた一つの僻があると、生れてより今日まで慣れ習はされた惡習慣が心に積り積つてはてしがない、惡いと知りつゝ後から〳〵惡を爲して、而も止めんとすれどもまた爲すほどに、習慣と云へば云ふものゝ惡しき煩惱が十重八重垣を造つておる。乍然一たび如來の御光りに遇ふときは無量永劫の罪も障りも、そこには何等の碍けとゞこうるものもなく、たゞ御光！それのみである。罪あるものは罪のあるまゝ、無ければないまゝ、只念佛して御佛の光明を蒙れよ、さればそこに何等の惱みも悲しみも、苦しみも一切を忘れて、如來の御慈悲と御光りとが思い思はれて、そこに喜びがあり、樂しみがあり、精進と努力とがあるばかりである」と。

風はヒューヒューと物凄ひ聲を立てゝ吹いて來るかと思ふ間に、雪はまくしかけるやうに激しく風につれて、恐ろしい程に降て來るのである。昨夜から此の冷さに、御飯も菜も凍り、本堂の花瓶の水まで凍つて居る。木々の梢も朝から銀光りに光つて居る。其のせいか松に降り懸つて居る雪は一しほ美觀を呈して居る所へ、此の雪吹に、梢の雪塊はボトボトと吹き落される。松の幹を見れば雪の吹きつける方のみ雪があたつて白く〳〵刻々に白さを增して行くのである。

あゝ善も惡もあの通りじや、行ふところそのまゝが業力となつて、心の底にぴつたりと附て行くのである。おゝ如來は正義である！正は正だしいのである、曲つてはいない、媚るのではない。嫋ふのではない。邪を邪とし、直を直とする所に、正の正たる所以がある。我等今まで不知不識の間に邪道を走り、盲目的に不義の道をまつしぐらに走つたのである。常に六根と云ふ六賊の爲に捕はれて、今

日まで六道を廻つたのである。深刻なる惱みは此の心の奥底に深くしみこんで居る。善導大師は今現に罪惡生死の凡夫であると云はれたが、この今現にと云はれたる詞が特に身にしみ〴〵と浸み入て我本心を突くのである。此程に浸み付た罪惡こそは誰に云つて貰ふ譯にはゆかぬ。只獨り我のみが持つて行くべき重荷である。地獄一定とは啻に親鸞上人のみの語ではない。我も其の一人であることが餘りに明確である。此の煩惱が目や口や身を通して、万法に向つて凡てを穢して行くのである。南無阿彌陀佛！〳〵〳〵

二

先日も隣人が鄕社建設の寄附を勸募に來られた。私は喜んで少し計り記帳をした。その時の話で實際問題に觸れて其の人が云はるゝに、「勸募は自ら進んで歩くのではない、人から賴まれて仕方なしにするのである」と。それで私は云つた、「あなたは賴まれるだけの人格があるから結講である。他から賴まれることも出來ない、むしろ賴んでも賴みがいのない價値なき者もある。又他の人は今日一日の食のみを求むる爲めに寺や社のことなんどに、手を出したくても出せない人があるのに、あなたはそのことができるのは仕合である」と申した。それは私がさうであるからである。

一歩話が進んで其の人の曰く、「あなたは正直のことのみを言はれるが、吾々商法人はどうしても嘘をつかなければ商賣ができぬ」と。此の淺ましいことを聞いたとき私は無限の恐ろしさに肝を冷したのであります。そして云つた。「あなた嘘をつかなければ商法ができぬと云はれるが、決て商の法にはそんな法はない。寧ろ眞面目で信用を高めよと云ふではないか。嘘をついても金をもうければよし、所謂金の爲めにこの尊い身命をないがしろにしてゐるのである。それであるから嘘がつけるのである。如來樣の光明に一度觸れる時は其の嘘が恐しくなつて來て嘘がつかれぬやうになり、遂には嘘をつけばつくほど商賣上に損をするのであり、得意（顧客）先を減らす源となるから、どうしても嘘は禁物である。嘘つけばそのまゝが嘘つき者ではないか。若も他人があなたに嘘をついたならあなたは何と云はれるか。吾々念佛者の仲間には嘘を恐れるものはあるが、好んで嘘つくものはない。寧ろ少しの善だにも之を爲して行きたいとの心懸けで進んで、行くものが多いのである。他に同情をすれば如來の本旨であると共に自己本心の歡喜であると言つた時のことが極めて瞬間に思い出されたのであります。

此の凄い風が常盤木の葉ももぎ散らし、枝をも折らん計りに吹き凄むやうに、世はたゝ金と名譽とのために、一は自己の口腹の慾を恣にせんが爲めに、あくまでも三塗八難の業を重ねて、尊き人生を價値なく動いて苦しむのみであると共に、益泥田を搔き廻すやうに濁りに濁りを增すばかりである。

三

乍然この凄い風俗の中にも如來の本願は少しも變りは無いのである。寧ろ變らないのが本願である。如來は一切の善を修して洩らすところなく、一切の切德を累ねて施さゞる所なし、我無量劫に於て大施主と爲つて普く諸の貧窮を救はんとは如來の本旨であらせらるゝ、如來の本願の文に、我國には地獄餓鬼畜生がない、三惡道に更ることもない、進んでは國中の人天身は眞金色であるとも說かれてある。三惡を無くする爲めには岩が黃金となる迄、煉つて煉つて煉りまくるやうに眞劍であらねばならぬ。嘗て弁榮聖者が京都に於て只私に向つて仰せらるゝに、『何も七日と定まつたことはない、三日念佛すれば三日だけの價値ができる。五日やれば五日やつただけの德は顯はれるものである。乍然心が怠ければ三日で成しとげらるゝ仕事も七日かゝつても出來ないが、之に反して、能々精出してやれば七日の仕事も三日で仕遂げることができるから、精々一心不亂になつて念佛せよとの御下命があつたことを思出すのであります。それと共に昨年の春であつた、あの曠漠たる濃尾の平野を一目の下に、十三ヶ國の連る山々を眺望できる行基寺さんの御殿にて私は告白したのである。「如來の四十

八願中、第一（無三惡趣二）第二（不レ更三惡趣二）第三（悉皆金色）の本願は現在私の進渉すべき道であり、第四（無有好惡）の願は衆と共に佛道を成せんとの目的とありますが、このことは餘りに高慢の樣であるがと申した時、御上人は直下にそれは私（上人）もその樣に思ふて居るがとて御所持の三部經を御出しになつて、暫くして、如來の本願、此の本願が我が本願でなければ眞實でないと言を正されて仰せになつた。

かやうなことなと、觀念聯合的に思い出されて、此の嵐と吹く雪吹があの美觀を呈する雪を散らしを考へ、そこに同情もなく、愛もなく、闇路の中をあてどもなく、あせりあせつて進んで居り、而も一切の本心を穢すから思へば思ふほど、光明嘆德章のことが思出で念佛せずにはゐられなくなつて、自然と冥目しつゝ念佛して居たら、何だか足が凍えるやうな冷さになり、踵が例によつて四歩板を付けてゐる感じとなり、目を開けば吹雪は袖に白くなつて居たから止むなく窓の戸を閉じて火鉢のもとに茶を頂くことにした。

四

斯くの如く暫く念佛しつゝ茶を飲んでゐると、正義と恩寵とのことが止めどもなく思出され、至心に合掌して居ると耐へられなくなつて來て、義足を付ける閑も惜い程に四ツバイし乍ら本堂に到て念佛を申しました。暫くすると病床の妻が私を呼ぶ樣な聲がかすかに聞えるから木魚を小さくして考へて居たが二の聲がない。あゝ我心の迷いかと又念佛を始める。其の中の所感をも少し述べさして頂きます。

私嘗て弁榮聖者に依て如來無盡の大慈悲の本願に至心信樂せよとの御下命を蒙り、其の後御來寺の約束までありしに、緣つたなうして柏崎にて御遷化あらせられ、渡りに舟なき感じをしつゝ淋しきまゝに光明主義のことを思い煩ふときに當り、土屋上人の膝下に寄り智悲の如來の本願を拜承することゝなり、こゝに本心の要求そのまゝ如來の要求であり、如來の光明は念佛の私を眞生に導き給ふことを聞さ得さして頂くことゝなつて、眞にその事實を翫味さして貰ふに到り眞生の尊さを心に感じ、少しづゝ身に實行の嬉しさを味ふ樣になつて、社會に向つて一大革正の叫びを擧げんものと身心を捧げて努力した。多くの友もできた、そは一に上人の御力である。我こゝに單身身を以て當らんものと、一は町の爲め一は己が方便門の爲め、聖德皇の殿堂建設にかゝらんが爲めの第一歩のためしとて、火葬場の新築も漸くのことに成就して、愈太子堂建設のため有緣の衆に向て淨財勸募に立てる時、あはれ宿業のしからしむるか左足切斷の止むなき災を受け、一年有半にして治癒し、寄附行爲をなし、豫算三分の一を得て建築に着手し、堂宇の建築なるや亦々病の人となり、淨財を得るに由なく、疊立建具もなしに空屋のまゝにして、前後も考ふることもなく、一ヶ年と十ヶ月を床の中に暮して終つた。

益々足を運ぶに困難つた。されどことの成就は此の身を使ふと否とにあり、乍然一方寺務が特に增して來て、有志の金を勸募することが遲々となればなる程心はいらつ、されど如何にいらち立つとは云へ時が來らねば出るわけにも行かず、如來はたゞ私の心を見そなはして哀れみますのである。

あゝ正義々々、如來の正義は如來の正義である。凡夫の云ふ自己のみに都合のよい處の名ではない。又正義を說くことのみが正義と呼ばれるものではない。眞に如來の眞實慈悲に催されて、自己の本心が是によつて醒め、芽へ來るとき、そこに止むに止まれぬ眞實の叫びとなる。所謂正義とは凡夫の叫び聲にあらずして聖者の心の奥底よりしぼり出される救いの聲である。又救いその儘が正義である。我が救はるゝ所、我が救ふて頂く所、我が救ふて行く所、救はして頂く所、そこに正義がある。

單なる口の喚び如何に大なるとも實行のない所、そこに何等の價値がある。我の病前の叫びは餘りに幼稚であり、餘りに愚かであつた。寧ろ虛僞的叫びであつた感じがする。單なる叫びの法螺貝で有

つた。思へば他の人も我の如くに有らしめた祚りに過ぎない。そこには他と共に救はれて行くと云ふことが無かつた。思へば思へば耻かしいことである。南無阿彌陀佛〳〵〳〵

五

成すことに於て成しつゝあることは其の儘成りつゝあることではあるが、我の如き單なる方便門にのみ、身をこがしつゝあることは眞にやるせがない、早く眞實門に出でゝ叫びたいとは我本心の要求であり、我本心の叫びである。願くば如來よ、如來の御力を我へ加へさせ給へ。私はあなたの本心の仕事が出來得るだけやらして頂きたいのであります。我力の運ぶ處だん〳〵少さへなり行く樣な愚かな感が致します。小僧は三子とも寺にはゐない、雛僧も去つた。妻の病も目下は良いと本人は云ふけれど愚かな私にはそれが良くも見えないのであります。彼は私の病める時、全身を使ふて私を看病してくれた、然を私は何たる愚か病める彼に充分の看護ができぬ。やらんのであるかやれぬのであるか思へば耻しことである。如來は私の第一の病のとき既に〳〵尊き御心の許に私に！あなたの本心、御慈悲の根本を示して下されたのである。それに私はなさけないこの有樣であります。私の第二の病のとき、あなたは私にこのまゝ救はれて居り、救いの道に立つべく無上の力を賜はりたのであります。それにそれに此の私は何と云ふ怠けかちの愚者でありませう。南無阿彌陀佛〳〵〳〵

如來が一切の善も德も御名の中に込められたるが如く、私の一切をあなたの御名のもとに込めて南無するのであります。至心に歸命し奉るのであります。おゝあはてるな、急ぐな、悲しむな、我はこのやうにして汝を常に守りつゝあるではないか。難有うございまする。私はあなたの御名のもとに明白に托鉢に出ます。今よりあなたの御名の下に妻の看病をいたしまする。寺務は私に與へられたる仕事でありますから、喜んでとります。凡てを勇んであなたの御名の下に！　おゝ立てよその足で！乞へよその口で！　乞ふ儘がそのまゝ我本願を知らしめて行くのである。其の手で一切を救ふて行け、そは汝の力の及ぶ限り！何と云ふ尊い御詞でありませう。南無阿彌陀佛〳〵〳〵。汝の一切の行動は我が見て居る！汝の悲しむ所我が悲しみであり、汝の歡喜する所我歡喜する所である。憂喜苦樂我は汝と共にあり！おゝ上人よ此の詞は我であり如來であります。一切の爲めに奮い立たずには居られません。一日々々一事々々、如來と共に働かして貰ふのであります。

斯の光に遇ふ者は三苦消滅し心意柔輭に歡喜踴躍して善心生ずと釋尊に明に我信ずる處を其の儘御發表下されてあるのであります。

上人よ、私は永々御心配をかけましたが本年今日は非常に安息を得ました。之からの私は私のできるだけの仕事をして太子堂も必ず竣功し、入佛式も如法に執行する所存で有ります。其の後のことは上人の御推考に任せます。何事も時等當來であります。

憂きことの尙此の上に積れかし限りある身の力ためさんとの古歌の下に稿を閉づ。

禪勝房（下ノ一）

中村神羽生

慈鎭和尙の御弟子の中でも隆寛律師と云ふ人は、小納言資隆の三男で叡山では相當傑出した天台の法將であつた。

宿緣内にかもして終に現在の名利を思ひ捨てつゝ宗敎革命の先覺者法然聖人の禪室に乘じられた時、其道心の深く厚きに驚かれた御上人は

「當時聖道門の有職でおはす上に、大僧正樣から愛され重んぜられて御出での御身として、何一つ御不足もないあなたが、之れ程迄に出離生死往生淨土の事に思ひを入れられると云ふ事は、本當に有難い事だと思ひます」。

とて懇ろに御話をなされた位であつた。而して其道心の深さ眞面目さは其念佛振りでもわかるのであつた。初めは毎日三萬五千を行じ中頃六萬遍となり後には八萬四

千の念佛をかゝした事がなかつたと云ふ事である。誠に落着いた純情な道心堅固の人であつた。尤も律をもやつて居られたから其日常生活も他の御弟子の人達よりは謹嚴で而してつゝましやかでもあつた。

されば御上人より撰擇集をも授けられた位ひ御上人門侶の中でも殊に有難い聖(ヒジリ)りであつた。

始終口癖の樣に「衆生稱念衆生稱念」と云つては、「私一人丈が御救ひに洩れる筈はない。本當に有難い事だ。」と涙を流しては喜んで居られるのであつた。

またこんな事もあつた。彼の山門諸堂の勤めは、從來堂衆丈で行はれて一般の衆徒は唯だ其儀式に參列する丈であつたが、堂衆の惡行がつのり終に建久三年の冬朝庭から官兵を差しつかはされ堂衆がしりぞけられて以來、諸堂の安居なぞ皆な衆徒の評議に依つて行はれる樣になつた。そこで、根本中堂の安居の結願に導師選定の沙汰が評定された時、隆寛律師が其器に當ると云ふ事で一般の評議にかけられた。

中には

「元ゝ〳〵山門の人ではあるが今では法然上人の弟子になつて仕舞つて專修念佛の行者になつて居るのだから此山の唱導師には少し向きが惡いではないか。」

と反對する者もあつたが

「それでは外に隆寛律師に上越す程の器量人があるか。」

と反問されたので、終に拔群の名譽を以て導師に招請されたのであつた。而して其結果は

「傳敎大師開創以來今日迄此位の唱導は初めてだ。」

との感嘆の聲は、比叡の山に響き渡つたのであつた。衆徒達は歡喜の余り大僧正でもない律師を輿に乘せてねり歩いた位であつた。

山門からこんなに優遇された程の器量人ではあつたが法然上人が往生の後は御上人への迫害が弟子の方へ移されてかなりひどく壓迫を被むらされる樣になつた。

中にも並榎の竪者定照ゝ云ふ人はごうした宿業からかひどく念佛嫌ひで徹頭徹尾念佛信者に凶害を加へ樣と劃策するのであつた。而して夫れはかなり計畫的に甘く實行された。山門の重立つた者は其術策にのせられた。而して朝庭へ度々奏聞された。而して終に御上人の門徒は諸國へ流がされる事になつた。

隆寛律師も其隨一とあつて奥州へ流される事になつた。森の入道西阿と云ふ武士に宰領せられて東國へ降る事になつた。然し西阿入道は念佛信者で律師とも知己の間柄であつた。隨つて奥州へは外の身代りが行つて律師は西阿の領地相模の飯山へ行く事になつた。夫は朝庭でも大目に見て居られたのである。何と云つても朝庭には

緣故が深かつたからでもあらう。栗田關白の後亂でもあり慈鎭大僧正の祕藏弟子でもあり其處には多少の手加減が加へられて居た事は無論の事であつた。

幾日かの旅を重ねて遠州見附の國府に逗留した。嘉祿三年七月中旬の事である。毎日照り込んで暑い日斗り續いた爲めに旅ははかどらなかつた。而して其宿々で律師の法談を聽かうとして押しかける人が三人五人七人ゝ引き切り無しに來るので、どうしても旅の足はのろかつた律師は殊に話上手であつたから行く先々で人々から歡迎された。

遠州には古い友の禪勝房が住んで居る筈である。

律師は昔なつかしい禪勝房を思ひ出さずには居れなかつた。

見附の宿舍でも近隣の地頭地侍豪士などが十幾人かつめかけて居た。

律師は法談のあとで尋ねて見た。

「此邊に蓮華寺と云ふ天台の御寺がある相ですが、其處に禪勝房と云ふ念佛のひじりが居る筈です。私とは古い友達ですから、是非遇ひたいと思ひますがどなたか御存知の御方はありませんか。」

すると一人の老人が小首をかたむけ乍ら云つた。

「蓮華寺と申しますのは此處から四里程離れて居りますかなり山の奥の三倉川と云ふ川をはさんだ衾田の里にあります古い御寺ですが、そんな念佛行者の噂は承つた事が御座いません。」

又一人が云つた。

「禪勝房と云ふ方は知りませんが禪勝と云ふ人は知つて居ります。土方人足の樣な事をして居りまして、シガない暮しをして居りますが別に念佛行者でもないらしいです。あゝした職業の人に似合ない何となく品があつておとなしい人ではありますがね。」

「夫れは都合に依ると私の友達かも知れません。試に手紙をかいて見ませう。」

誠に禪勝房は寺に皈へらず一切の名利を捨てゝ市に隱れたのであつた。見附在の片田舍に見すぼらしい小屋を建てゝ獨り靜かに住つて居るのだつた。持佛も置かず專ら外に現はるゝ事を恐れて念佛も口の内斗りでして居つた。而して今日の爲めに土方人足に出たり番匠の手傳に賴まれたりするのだつた。

今日も見附の町で或る家の壁塗りの手傳ひをして居つた。其處へ宿の小者が使ひに來た。手紙を持つて來たのだ。不思議にも自分名差しの手紙を持つて來たのである

受取つて見ると夫は思ひも寄らぬ京は長樂寺の山内に住む隆寛律師からの消息であつた。

山門の讒訴に依つて東國へ配流される事、もう再び今生では遇へないであらうと思ふ事、今見附の滯留にあなたをなつかしがつて居る事などが書かれてあつた。

禪勝は吃驚して仕事着のまゝ一さん走りに使の者には物をも言はず飛び出した。

律師は千秋の思ひで使の帰つて來るのを待つて居つた。うすきたない身なりをして中庭へ這入つて來た男の顏を見ると、

「オ、禪勝さん！」

と云つて椽から飛び降りずには居れなかつた。

禪勝も

「隆寛さんでしたか、おなつかしい！」

と手を握らずには居れなかつた。

浮世を思ひ捨てた二人の間にも人間の情熱があつた。涙だ。涙だ。絶えて久しい再會に人間らしい涙がかはされたのだ。あゝ何と云ふ美しい情景であらう。

平素威張り散して居つた地侍達は鳩が豆鐵砲喰つた樣な顏をして此美しい情景を眺めて居つた。

だが、隆寛律師は屹と襟を正して云つた。

「かつて御上人樣が私へ御話しになつた事がありますかればよいと思つて居る可き人ではない。屹度澤山の道友を作つて大悲弘願の趣きを其身に現はして呉れるだらう。

と仰しやつた事でした。然し今あなたの其の御姿を見るのは本當に悲しい事です。」

言葉は簡單だが、語氣はかなり強い響きを持つて居つた。禪勝はハツシと斗り胸を打ちくだかれてハラ〳〵と涙をこぼした。

「あゝさうでした。私の考へは間違つて居りました。私は利己主義でした。聲聞根性でした。私にはまだ本當に如來樣の御慈悲が分つて居ないのです。あゝなくなられた御上人樣にも申し譯がありません。御上人樣ごうぞ御許し下さいませ……。」

其處には本當の悔改めがあつた。本當の感激があつた本當の感謝があつた。本當の發奮があつた。

見よ。涙に濡れた彼の顏を。而して其顏の輝きを。

◎吾朋便り

□越後便り

越後の柏崎で此ほど町會議員の選擧がありました。然に議員三十名の中六名までの眞生會員が當選せられたことは實に町の爲めにも限りない喜びであります。原吉郎樣と渡邊八右工門の御二方もその中にありますが、原樣は今まで枇杷島村に屬してゐられたのが永年の懸案として柏崎町に合併の御盡力中でありましたのが愈々今度御大禮記念としてそれが昨秋成立したのであります。以上道友の方々が町會議員となられたのは議員その人の人格と町内各位の御人望と御盡力とによることもとよりでありませうが、又此の中にはきつとかくれたる道友のまたなき御活動の御力もこもつてゐることと存じます。願くはかうした動きが更に全國的に波及し、更に村會にも縣會にも國會にまでも進出せんことを望んで止みません若しも念佛が本當の宗敎ならばそれは必ず人間の生活として、日常の生活改善にまで進むのが當然でありませう。さうして若もその生活改善が若し私共の生活として當然求められるものならばそれが社會生活の改善となり、政治問題にまで進出すると云ふことは決して私共の忘れてはならぬことであります。此の意味に賴て私共はそれが先づ柏崎町に於て我道友の人々によつて試みられたことを此上もなく喜ぶ次第であります。（觀道）

○岐阜　辻芳子樣より

幸多かつた年も逝かんとします。只今私はなつかしい追憶を通して一人ほゝえんでおります。思へば皆樣の慈悲のみ手によつて絶えざる感謝と新しい力のもとに生きて行く事の出來ましたことを深く〳〵お禮申し上げます。

ともすればいら〳〵せんとする私の心もお蔭樣で落ちついて行く樣に思はれます。

ほんとに自由の天地を自ら縛らないでゆつたりことをして行きたいと存じます此頃私は夜々ミレーの畫集をみることを樂しみの一つとして居ります。

畫かれた人の態度を見ます時、慘苦の前にたじろがないがつしりした眞劍さはほんとに力强く私を鞭打ちます。默々として只なすべきことを眞劍になす與へられた使命を心から喜び精一ぱいの力でなしておられる態度を見るにつけミレーの人格も又しのばれまして、數々を敎へられました。

一日の仕事を終つて自己を省みた時、暗い想に心をのゝく樣な日を過したくないと願つて居ります。

○柏崎町　石黑武夫樣より

御上人樣の常にお敎へになります御言葉の一つ〳〵が皆私の生活の中に働いてゐるのを感じます。「念佛の大なる力」一つの出來事の中にそれを發見しては驚いたり悅んだりしてゐます。去年の春先の自分と今の私、何んだか別人のやうに思はれます。と云つて何も偉くなつたと言ふのではありませんが、私の今の心境があまりにも自然律にかへつたのに氣付きます、などらかです明るいです。

◎誌代御拂込御芳名を本年一月領收の分から追號掲載させて頂きます

○誌代拂込御芳名

○金壹圓　東京野澤仲子樣、鹿兒島柳元三之助樣、新潟高橋久治樣、大阪寺井靜子樣、大阪日暮與治樣、擧母須藤萬吉樣、四日市伊藤善太郎樣、尼ヶ崎橋本信吉樣、神奈川小林千代子樣

○貳圓　岐阜松浦重三樣、三重八島七郎治樣、香川細谷關雄樣、大阪曾我尾樣、岐阜竹村清音樣、若原菊松樣、仁川阿武誠樣

○五圓　牛田內田忠平樣

○拾圓　仁川山口常照樣

○貳圓　仁川小谷益次郎樣

○壹圓　愛知高木千代樣、東京石田庄太郎樣、仝中村武臣樣、仝宮下くら樣、仝谷口年泰樣

○參圓　柏崎市川秀二樣、木原德平樣、山岸鷲郎樣

○貳圓　柏崎岩城吾一郎樣、北原虎三郎樣、福原泰作樣、岩下肇兒樣、小林嘉一郎樣

○壹圓　柏崎後藤寅三郎樣、大久保重俊樣、山田健作樣、廣川平太郎樣、安澤時太郎樣、小山小市郎樣、中村利平樣、石黑太一郎樣、小池雪子樣、吉岡莊吉樣、猪爪かじ子樣、池田清八樣、新澤新吉樣

○五圓　柏崎桑野喜太郎樣

○六拾錢　柏崎歌方ちい樣

○五圓　名古屋尾上銀子樣、崇德寺樣、

●拾圓　伊藤留吉樣、尾上銀子樣（寄贈）

○壹圓　宮崎うめ樣、中村たつ樣、加藤鍵介樣、磯田まさ子樣、角田とみ樣、中川五十子樣、惠本久子樣、安藤康次郎樣、西脇賢吾樣

九八六の

本誌定價	
一部	金十錢 郵稅共
半年	金六十錢 仝
一ヶ年	金一圓 仝

註文の注意

◆講讀希望者は代金を添へて御申込下さい

◆誌代は總て前金御拂込の事

◆送金は振替によるのが便利です

振替口座東京四七二八八番 眞生社

昭和四年二月十日印刷納本

昭和四年二月十二日發行

東京市芝區芝公園十四號地九番

編輯兼發行人　土屋觀道

名古屋市西區隅田町二一番地

印刷人　百々治之助　電話西(5)二九三番

名古屋市東區鍋屋町二丁目

印刷所　商號 愛知 山田活版印刷所　電話東(4)〇三五五・三五五

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所　眞生社

（大正十四年八月十三日第三種郵便物認可）　昭和四年二月十日印刷納本　昭和四年二月十二日發行　（毎月一回十二日發行）　第八卷　第二號